

■ 目先は米朝首脳会談の合意内容に対する市場の反応に注目！！

昨日(2/27)から行われている米朝首脳会談において、トランプ米大統領が北朝鮮の金正恩(キム・ジョンウン)委員長との親近感を伝えると同時に「多くが解決されるよう望んでいる。それは長期的には素晴らしい状況につながるだろう」などと非核化の進展に期待を示したことによって、市場では円売り・ドル買いが一旦活発化し、ドル/円が再び111円台を回復する場面があった。

一つの焦点は「米国が北朝鮮からどこまで非核化の具体的な措置を引き出せるか」にあり、一部では寧辺(ニョンビョン)など一部の核・ミサイル施設の廃棄や査察に応じる可能性が浮上しているとも伝わる。本日(2/28)中には両国首脳が合意文書に署名する運びとなっており、その結果が市場で「踏み込み不足」、「期待外れ」と捉えられた場合には、一旦買われたドルが売り戻される可能性もないではないため、なおも一定の警戒は必要となる。

今回の米朝首脳会談の最終合意内容に対し、市場が極端に失望することがなければ、ドル/円は110円台後半の水準で2月を終える可能性もあり、その場合は「月足・終値」で一目均衡表の月足「雲」上限(現在は110.61円)や31カ月線(現在は110.56円)を上抜けるかどうかが大いに注目されることとなる。これらの水準を上抜ければ、それは昨年11月以来ということになり、そこから一段の上値期待が市場に漂い始める可能性もある。

目先を言えば、ドル/円は110.60-90円のレンジを中心とし、レンジ上限を上抜ければ、あらためて200日線が位置する113.00円を試しと見られる。逆に、レンジ下限を下抜ける動きとなった場合は、21日線が位置する110.35円が意識されやすくなると見る。

他方、足下でブレグジットの問題を取り巻くムードが少々和らいできていることも市場ではリスクオンのムードを盛り上げることに貢献している。ここに来て「メイ英首相がEU離脱期限を延期する案を検討」、「首相は合意なきEU離脱の可能性を正式に排除することを提案する」などと伝えられており、市場は期待感からポンド買いの姿勢を強めている。

英下院は昨日(2/27)、3月12日までに英と欧州連合(EU)の合意内容が議会で承認されなかった場合、「合意なき離脱」や「短期間の離脱延期」の賛否を議会に問う方針を賛成多数で可決。ブレグジットの問題が少々先送りされる可能性が強まったことは、確かにポンドを一旦買い直す材料と見做されるに値するということになるのだろう。

とはいえ、なおもメイ首相は3月12日までアイルランド国境問題の解決に向けEUと協議を続ける方針を堅持しており、昨日の議会での党首討論では「合意なき離脱を回避する唯一の道は英・EUの合意に賛成することだ」として、合意なき離脱を排除しない姿勢も見せている。

フランスのマクロン大統領のように「(短期の延期で難題の国境問題が解決するか)ははっきりした見通しが無い限り、延期を受け入れることは絶対ない」との見解を示す向きもあることは事実である。また、仮に短期的な離脱期限延長が決まったとしても、その先行きは依然不透明なままであり、場合によっては「期限延長」が決定的となったところで、ポンドに対して「事実で売り」となる可能性も大いにありと見られる点は要注意と言えよう。

拙速な判断は禁物(安易なポンド売りには一定のリスク)だが、やはりどこかでポンドが戻り売りに押される場面はあるものと見ておいていいたろう。それは同時にユーロの上値を押さえる形でも作用する可能性が高く、そうでなくともユーロ圏経済の減速が顕著になっているなかで、ユーロ/ドルの一段の上値を積極的追う向きは限られると思われる。

目先、ユーロ/ドルは1.1360ドルを軸として1.1320-1.1400ドルのレンジ内での値動きが中心になると個人的には考える。やはり1.1400ドルは上値の重しになりやすく、ひとたび1.1360ドルを下抜けてきた場合は、1.1320ドルを目安に短期ショートを振る算段で臨みたい。

来週は3/7にECB理事会が予定されており、今しばらくは様子見気運が強まりやすい。

(02月28日 11:55)